HACK

9

兄弟

KAI SHIGIHARA

9　兄弟

　深夜十一時。
　自宅の玄関前、ジュリアスは視線を感じて振り返った。
（なんだ？）
　視界の中に、視線の主は見当たらない。何かの望遠レンズ越しの視線だろうか。
（！）
　不意に、その視線に強い感情がこもった。殺意だと感じた瞬間、ジュリアスは玄関扉をあけて、中へと入った。玄関扉も、家じゅうの硝子も、すべて防弾になっている。セキュリティーについては、家を建てる時に、父からうるさいぐらいに注意され口出しされたからだ。
「ジュリ？　どうした、何かあったのか？」
　廊下の奥、リビングにつながるドアがあいて、ドミニクが姿を見せる。
「まだ居たのか」
「おい、ひどいな。話があるって言っただろ」
「今夜は会えないって、返事したはずだ」
「会えてるからいいじゃないか」
「話をする気分じゃないんだよ」
　ジュリアスはコートを脱ぎながら、家の外を監視しているカメラのモニターを起動させる。
「誰かいたのか？」
「わからない。そんな気がしたんだ」
　カメラに、不審者はうつっていなかった。あれが気のせいだったと思うほどめでたくもないので、ジュリアスに殺意を向けた誰かは、きちんとカメラの存在に気がついて死角から狙っていたか、カメラの守備範囲よりずっと遠くから様子をうかがっていたか、どちらかだろう。
（気をつけておこう）
　殺意を持ってこちらをうかがっている奴がいるということを知っていて行動するのと、しないのとでは、全然違う。
「レスリーと会っていたのか？」
　声をかけられて、ジュリアスは不機嫌丸出しで、押し掛けてきた兄を振り返る。
　ドミニクは勝手知ったる弟の家という感じで、ダイニングテーブルに買ってきたらしい料理をひろげ、ワインをあけていた。今日は一日外出していたと聞いている。それなら、まっすぐ自宅に帰って休めばいいものを、話があるとメールをよこし、会えないと断ったのに、ジュリアスの

家に押し掛けてきている。どうやら、昨日、レスリーに余計なことを言ってしまった、ジュリアスにフォローしなければと思っているようだ。
「レスリーには会えなかったよ。今日も何かあったのかもしれない」
　コートを脱ぎ、手を洗って、ジュリアスもダイニングテーブルの椅子に腰を下ろした。夕食を食べ逃してしまって、もう空腹はすぎてしまったが、料理があるのを見るとお腹がすいてきた。ドミニクがグラスにワインをそそいでくれる。
「昨日、守衛所までレスリーを迎えに来たんだって？」
「……なんで知ってる」
「うちの中隊の連中が目撃して教えてくれた。いい雰囲気だったって？」
「昨日からレスリーはちょっと変なんだ。何かショックを受けていて、ひどく弱ってる。心当たりない？」
「……俺が余計なこと言ったから？」
「違うよ。レスリーがドニの言葉ぐらいで怯えるもんか」
　ドミニクが気にしているので、ジュリアスはあえてそんな風に茶化して言った。
「えー、あーっと、本当にごめん。レスリーは本当に不愉快だったと思う」
「気にしてないって、彼女、言ってたよ」
「そっか。明日会うから。ちゃんと謝っておく」
「二中隊の人に会う機会があったら、それとなく昨日のレスリーのこと、聞いておいてくれないか。絶対に何かあったと思うんだ。とてもショックを受けることが」
　伝わってきた、あの恐怖。ジュリアスは仕事の会議中だったのだが、発言中に突然伝わってきたそれに、しばらく声もでなかったほどだ。
　会議に同席していた面々の証言によると、ジュリアスは硬直したと思ったら、みるみる真っ青になり、そのまま気絶するのではないかと思ったそうだ。レスリーの受けたショックの大きさがわかるというものだ。
「レスリーとは相性がよくてさ、ホットライン的なものがあるんだろ？　彼女が隠していることも、見えたりしないのか？」
「全く見えない」
「特に相性のよくない相手でも、時々、隠し事が見えたりしてたじゃないか」
「それはね、隠してることって、油断するとぽろっと話しちゃったりするだろ。口に出して言ってしまう時があるぐらいなんだから、心の中で呟くことは、もっとよくあることなんだよ。それを偶然、聞きとったというだけのことだ。でも、レスリーの場合はね。……俺と彼女では、精神的な強さでは、彼女の方が強いんだろうな」
「……マジか」
「彼女との間に、ホットラインがあるなとは感じる。だから、ちょっと距離があっても、彼女の心に話しかけることが出来るし、彼女の存在を感じることも出来る」
　今日も、約束の時間に現れないレスリーを探して、自宅のマンションに気配を見つけた時は、心底安心した。マンションの外から彼女に話しかければ、ちゃんと気がついてもらえて、会話も

出来た。人間相手には力の伝わりにくいジュリアスには、当たり前のことではない。
「でも、彼女の心の中を探ることは出来ないな。彼女も俺との交信に慣れてきていて、ますますその傾向が強い。彼女が嘘を言っているとわかっても、その理由は彼女が教えてくれなければわからない。無理に探ろうとすれば、多分、強烈にはねのけられる。滅茶苦茶強烈にね」
　昨日の告白の拒否は、トラウマになりそうな、強烈さだった。
「何かショックなことがあって、彼女が怯えているのはわかるんだ。でも、原因は教えてもらえない」
　それでも、今日、ジュリアスが話しかけたことで、レスリーは安心していた。昨日、真っ青なレスリーを抱きしめて感じた、彼女の信頼と安心を、今日も感じることが出来た。昨日のようにしっかりと抱きしめたかったが、彼女に拒否されたので、今日は彼女が眠るまでマンションの外で見守った。
「まあなあ、彼女が会いたがっていないって、会いに行けなかったぐらいだからなぁ」
「だまれ」
「昨日、会いに行けたのは、彼女に何かあって、お前に助けを求めたからってことなのか？」
「……どうだろう。わからない。どちらにしても、俺は助けるけど」
　そう断言すると、ドミニクは小さく笑った。
「なんだよ」
「いや、いいんじゃない？　会えない会いたいってぐだぐだしてた時より、今の方がずっといい。レスリーのお陰で、お前、ちょっと変わったよな」
「そうかな」
「うまくいくといいな。応援する。今のとこ、足引っ張ってるけどさ。昨日のことも、探り入れとくよ」
「ありがとう。……あのさ、ドニ」
　と、兄を見上げると、ドミニクは途端にいやそうな顔になった。
「うげ。きたぞきたぞ、お兄ちゃん助けて目線が」
　かなりムカツク言い方だったが、これからお願いをしようと思っているのには間違いないので、スルーすることにした。
「貴族のプライベートデータ、見れないよな？」
「見れるわけないだろ、馬鹿もん」
「兄貴でも？」
「親父だって、非常時じゃなきゃ無理だろ」
「そうか」
　この国における貴族とは、本当の本当に特権階級なのだ。貴族たちの権利やプライバシーは、強固に守られている。
　更に、この国には異能力者がとても多い。ジュリアスほどの能力者はまれだが、感応力でコンピューターにアクセスできる能力者は存在する。そのため、貴族のデータに関しては、完全にそれ以外のデータとは隔離して管理されているのだ。セキュリティーは恐ろしいほどに強固で、

幾重にもほどこされたセキュリティーの壁はそれぞれ作成者が異なり、一番最後の鉄壁を作成したのは、あの、レイ・アスティンだと噂されている。勿論、本人は否定も肯定もしていないけれど。
　それほどの壁なら、挑みたくなるというのが人情で。ジュリアスはもっと若い時に、無謀にもチャレンジしようとした時がある。例のごとく、アクセスするために意識を失っていたわけだが、目が覚めたらそこは見知らぬ部屋で、目の前にはとても怖い顔をしたネイサンと、とても困った顔をした父がいた。もう二度と近づきませんと誓わされ、もう二度と近づきたくないと思えた、恐怖体験だった。
「レスリーは、過去、ストーカー被害を受けたことがあるそうなんだ」
「初耳だ」
「ドニが知らないってことは、軍に就職する前ってことだと思う。そのせいで、色々なトラウマを抱えているみたいなんだ」
「……なるほど。男を寄せ付けない理由の一つがそれかな」
「誰にも言うなよ」
「わかってる。その過去を探りたいんだな？」
「うん。裁判にまでなったそうだから、データが残っているはずなんだ」
　レイノックスにいた時、レスリーはなんでもないナンパ男に、驚くほどに怯えていた。いつも冷静で、きちんと物事に対処するレスリーが、あれほど怯えて、ただただ縮こまっているなんて、ジュリアスには信じられないぐらいだった。それだけ、そのストーカーはレスリーに深い傷を負わせたということなのだろう。
　接近禁止令が出ているという、そのストーカーが戻ってきたとは考えにくいが、怖がって怯えているのに口を閉ざすレスリーなんて、それが原因としか思えない。
「貴族データにアクセスするのは諦めた方がいい。アクセスできれば、そりゃ早くていいだろうけど。女王陛下に事情を話して許しを乞うなんて、ごめんだろ？」
「その前に、ネイサン様に殺されそうな気がする」
　あの時の恐怖体験は生涯忘れられない。
「データは諦めて、噂話を探るんだな」
「噂話？」
「貴族社会はすごく狭くて、噂話が広がるのは、とても早い。伯爵令嬢がストーカーにあって裁判になったなんて、当時の貴族たちの間で絶対に噂になったに決まってる。そういう噂話に詳しい人に聞けばいい」
「って言ったって、詳しい人って……」
　にやりと、ドミニクが口の端をあげる。
「そっか、母さんならきっと知ってる」
　二人の母は、決して噂好きというわけではない。息子たちの目から見ても、それはそれは上品で生まれながらの貴族という感じの、美しくしとやかで優しい女性だ。
だからなのか、貴族たちにとても慕われていて、いつも何かと頼りにされている。貴族社会に広

くコネがあり、ネットワークがある母の元には、いつでも最新の情報が届いているのだ。
「今、ハミルトンだっけ？」
「王都に来てるよ。実家にいる」
　すぐにでも会いに行きたいが、もう夜中の十二時をまわろうとしている。明日の朝一番に聞きに行こう。
「ありがとう、兄さん」
　あえてしおらしくお礼を言えば、ドミニクは満更でもない顔で、よしよしと頷いていた。
　いつも優しくて甘い兄に、ジュリアスはグラスをかかげて微笑んだ。

　翌朝。
　ジュリアスはこっそり軍のシステムに侵入すると、父の予定を確認した。どうやら、今日は午後からの出勤らしい。昨夜は遅くまでパーティーだったようだ。
　父に話を聞かれると、色々と面倒なことになりそうなので、午後になってから母を訪ねることに決めた。午前中は仕事に行くことにする。
「ついでに俺を送っていってくれよ」
　トーストと、ジュリアスのいれたコーヒーを飲みつつ、ちゃっかり泊ったドミニクがのんびりそう言ってきた。
「一度、帰ったら？　シャツも替えてないしさ」
「オフィスにあるからそこで替える」
　マメに見えて、この兄は結構ずぼらなのだ。軍人らしく大雑把と言えるかもしれないが。
「あ、そういえば俺のがある」
「除隊するときに返却しなかったのか？」
「持っていくの忘れたんだよ。そしたら、返却したことにしといてあげるわって、シモーヌさんが。彼女、親父のファンだから、俺にもよくしてくれるんだよね」
「一大隊の事務長がそれでいいのかねえ」
「軍服ぐらい構わないだろ。我が家には、軍服なんてそこらじゅうにあるんだし」
　ジュリアスのシャツに着替え、ちゃっかり自分の着ていたシャツをジュリアスのランドリーボックスに放り込んでいる。
　そして、支度をさせれば、流石に軍人だけあって、手早い。朝食を食べ終わったのはジュリアスが先だったのに、支度が済んだのはドミニクが先で。
「先に出てるぞ」
　と、車のキーを持って先に出ていかれてしまった。
　ジュリアスも急いで玄関を出ると、ドア横に設置してあるタッチパネルに指先をのせる。この家のシステムは、セキュリティーも含め、ジュリアスのお手製だ。鍵を使って物理的に施錠することも出来るが、ジュリアスが施錠するときは家じゅうのセキュリティーをチェックがてら、能

力を使って施錠する。
（よし。異常なし）
　家じゅうのチェックを完了し、施錠を命じると、カチリと鍵のしまった音がした。
（あ、）
　その時、昨夜感じた、あの殺気が迫っているのを感じ取った。
「伏せろ！」
　ほぼ同時に、ドミニクの声。ジュリアスは即座に地面に倒れ伏した。
　がんっっと、玄関扉に何かが激突する。
「動くなよ」
　地面に伏せたままのジュリアスのすぐそばに、ドミニクが駆け寄ってきた。ジュリアスはドアに触れて解錠しつつ、ドミニクを見上げる。
　ドミニクは、彼愛用の銃を抜き、銃口をかなり上側に向け、狙いを絞っていた。そして、すぐに発砲。
「ヒット」
「マジで」
「でもないか、致命傷じゃないな」
　どこから撃たれたのか、ドミニクがどこを狙ったのか、ジュリアスにはまるでわからない。
「どこ？」
「あの家だよ。そんなに遠くない。お前は家の中にいろ」
「わかった」
　ジュリアスが安全な家の中に入ると、ドミニクは銃を手に持ったまま走り出す。ドミニクの足の速さは、超人的だ。そして、跳躍力も人間離れしている。道を走り、向いの屋敷の高い塀の上にひらりと飛び乗り、その狭い塀の上を易々と高速で走ると、更に向こうの屋敷の塀の上を走り、二階の屋根に飛び移り、屋上へと飛び上がった。
「あんな所から撃ったのか」
　ドミニクは、屋上の様子をざっと見てまわり、犯人の逃走経路を確認しつつ、携帯で電話を始めている。多分、彼の部下を呼びよせているのだろう。
　兄の超人的な運動能力については、子供の頃から見慣れているが、何度見ても見とれてしまう。背中に羽が生えているみたいで綺麗なのだ。子供の頃は、兄は空を飛べるのだと、かなり本気で思いこんでいた。
　それにしても、兄のあの銃で、あそこの屋上は射程範囲外だろう。ドミニクの射撃の腕も、人間離れしている。本人は、気合であてると言うが、気合だけでライフル並の射程距離を当てられては、銃の性能をどうしてくれるんだと言いたくなる。
「……油断した」
　昨夜、狙われているのは感じたのに。ドアの前で無防備に背中を向けて立っていたなんて、油断するにも程がある。今のセキュリティーシステムは、改良しなければ。
　それにしても、誰だ？　誰に狙われている？

「ジュリ、もういいぞ」
　玄関ドアが開いて、ドミニクが顔を見せた。
「ありがとう、ドニ」
「あれぐらい、お前一人だって避けられただろ。それより、誰に狙われている？」
「俺もそれ、考えていたところ。誰だろう」
　誰に狙われているのかわからないなんて間抜けすぎると、ドミニクに睨まれる。その通りなので、ジュリアスはため息をついてもう一度、考えてみることにした。
　すぐにドミニクが呼んだ彼の部下たちが集まってきて、ドアにめり込んでいる銃弾を取り出し、屋上に残っていた血痕を採取する。ドミニクの撃った銃弾は、犯人にヒットしたものの、致命傷とはならなかったようだ。残っていた血液の量から、ドミニクの部下達もそう判断した。
　ジュリアスはドアにめり込んでいた銃弾を見つめながら、この銃弾から犯人の情報を読みとる能力が自分にあればと考えていた。そういった異能力の持ち主もいて、犯罪捜査に協力している者も多い。ジュリアスは許可をもらってから、銃弾に触れてみる。目の前につまみ上げ、集中してみた。するとなぜか、頭の中に、レスリーの顔が一瞬、浮かんだ。
「え」
　次の瞬間、ジュリアスは体を大きく震わせ、驚愕と恐怖に、目を見開いた。口が大きく開くが、声が出ない。息も吸えない。震える手を、喉にあてる。でも、声が出ない。
「ジュリ！」
　ぐいっと、ドミニクに肩をひかれた。
「う、わっ」
　金縛りがとけたように、体中の力が突然抜け落ちた。ドミニクが支えてくれなければ、地面に激突していただろう。
「おい、ジュリ、大丈夫か？　おい！」
「……リーだ」
「なんだって？」
「レスリーだ」
　これは、今、レスリーが体験している恐怖だ。そして、もしかしたら、気を失ったのかもしれない。
「彼女を助けに行かないと」
「わかった」
　ああ、やばい。
　ジュリアスは歯を食いしばり、落ちていく意識を食い止めようと抗った。
「レスリー」
　無事でいてくれ。すぐに、行くから。すぐに、すぐに。

　ジュリアスは、意識を失った。